

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：17101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2014

課題番号：26580052

研究課題名(和文) T.S.エリオットの「東洋哲学ノート」の研究

研究課題名(英文) A Study of Eliot's "Notes on Eastern Philosophy"

研究代表者

古賀 元章 (KOGA, MOTOAKI)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：80416445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：1913-14年、ハーバード大学大学院に在籍していたT.S.エリオット(1888-1965)は、宗教学を専門とする東京帝国大学教授の姉崎正治(1873-1949)の講義「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」という表題の筆記録を書き残している(ハーバード大学ホートン図書館に所蔵)。本研究は「日本における仏教各派の宗教的・哲学的思想」の用語の多くを解読した後、幼少期から1914年における姉崎の仏教思想とエリオットの人生に焦点をあてて、彼らにとってこの筆記録がどのような意義があったのかを検討した。

研究成果の概要(英文)：In the period 1913-14, T. S. Eliot (1888-1965), as a graduate student, attended the Harvard lecture "Schools of Religious and Philosophical Thought in Japan" by Masaharu Anesaki (1873-1949), a religious scholar at Tokyo Imperial University, and wrote about the lecture in his "Notes on Eastern Philosophy," which has been held at Houghton Library at the university. This project deciphered many contents from the "Notes on Eastern Philosophy," and examined what significance the lecture was for Anesaki's thoughts on Buddhism and Eliot's life, paying attention to the time from their childhood until 1914.

研究分野：英文学

キーワード：T.S.エリオット 「東洋哲学ノート」 姉崎正治

1. 研究開始当初の背景

1913年に渡米する前、宗教学者で東京帝国大学教授の姉崎正治(1873-1949)は、美術評論家で畏友の高山樗牛(1871-1902)の影響を受けて、日蓮上人(1222-1282)への信仰に基づく学究生活をする。日蓮信仰の根本経典は、言うまでもなく『法華経』である。この経典の特色は、宇宙の真理としての一乗妙法、久遠の人格的生命としての釈迦(仏陀)、現実の人間の活動としての菩薩行動である。姉崎の学究生活はこれらの特色を反映している。

1914年、ハーバード大学大学院生であったT. S. エリオット(後にイギリスに帰化した詩人・劇作家・批評家、1888-1965)は海外留学をする。それは、彼が目するイギリスの哲学者F. H. ブラッドリー(1846-1924)を主として研究するためばかりではなく、躰に厳格な両親のもとから離れて自分の新たな人生を捜し求めるためでもある。

こうした研究開始当初の背景を踏まえて、本研究は渡米中(1913-1915年)の姉崎の仏教思想と海外留学前のエリオットの人生に注目する。その際、彼らの幼少期から1914年までの時期に焦点をあてる。

2. 研究の目的

1913年、日本ハーバード・クラブ(ハーバード大学を卒業した日本人の団体)の基金で、ハーバード大学に「日本の文学と生活」という講座が新しく設置される。それは、アメリカにおいて日本への学問的関心と呼び起こすためである。同クラブは、講義をする人物を検討した結果、有能な宗教学者の姉崎正治を選んでいる。

1913-1915年、姉崎はハーバードで講義をする。ハーバード大学大学院生のT. S. エリオットは、1913-1914年の講義「日本における仏教各派の宗教的・道徳的思想」に出席し、「東洋哲学ノート」という筆記録を書き留めている(現在、同大学ホートン図書館に所蔵)。姉崎やエリオットの研究者たちは、残念ながら、この講義を断片的に概説するだけにとどまっているし、「東洋哲学ノート」も同様である。

そこで本研究は、「東洋哲学ノート」が姉崎やエリオットにとってどのような意義があるのかを検討するため、次のような項目に注意を払った。

(1) 何をどこまで明らかにするのか

難解な内容の多くを解説した「哲学ノート」の注(主に仏教用語)を作成し、その内容の特徴を明らかにする。

幼少期から1914年までを視野に入れて、姉崎の仏教思想やエリオットの人生を探究する。

(2) 本研究の学術的な特色及び予想される結果と意義

世界に先駆けて、「東洋哲学ノート」の研究をする。

この筆記録の研究成果を国内外の人々に公開する。

(3) 予想される結果と意義

国内外における姉崎やエリオットの研究を促進させることが予想される。

仏教、日米の交流などに関心を持つ国内外の人々にも貴重な資料となる。

(4) 斬新なアイデア

エリオットの「東洋哲学ノート」は全面的に公開されていない。そこで、この筆記録の研究成果を世界で最初に公開する。

国内外の多くの人々に知らせるため、「東洋哲学ノート」の研究成果報告書 日本語版の『姉崎正治の仏教思想とT. S. エリオットの人生 幼少期から1914年』、英語版の *Masaharu Anesaki's Thoughts on Buddhism and T. S. Eliot's Life: From Their Childhood until 1914* を作成する。

国内外の人々が、時間や場所に束縛されず自由に研究成果報告書を見ることができるようになるため、日本語でも英語でもアクセスできるホームページを作成する。

(5) チャレンジ性

「東洋哲学ノート」の内容を単に全面公開するだけではなく、仏教用語を解説する注を付けたり、この筆記録が姉崎の仏教思想やエリオットの人生に及ぼした影響を論じたりする。

の研究成果を、可能な限り国内外の多くの人々に知らせる工夫(日本語版と英語版の研究成果報告書の作成)をする。

3. 研究の方法

研究の方法は次の通りである。

(1) 翻訳業者の協力によって、「東洋哲学ノート」に記述された内容を可能な限り解読する。

(2) 中村元ほか編『岩波仏教辞典』(岩波書店)、中村元著『佛教語大辞典 縮刷版』(東京書籍)などを参考にして、研究成果報告書(日本語版)の注を作成する。

(3) V. S. アプテ編『梵英辞典 改訂増補版』(臨川書店)、B. B. ヴィディヤランカール・A. ヴィディヤランカール・中島巖著『基本梵英和辞典 縮刷版』(東方出版)な

どを参考にして、研究成果報告書（英語版）の注を作成する。

（４）幼少時から１９１４年までに焦点をあてた研究成果報告書の内容（姉崎正治の仏教思想、Ｔ・Ｓ・エリオットの人生、原文の活字化、挿絵のスキャン、主に仏教用語の注）（日本語版、英語版）を作成する。

（５）研究成果報告書（日本語版、英語版）を姉崎やエリオットに関係のある組織などに郵送したり、同報告書をホームページで公開したりする。

４．研究成果

幼少期から１９１４年までに注目して、姉崎正治の仏教思想とＴ・Ｓ・エリオットの人生について考察した結果、本研究は次のような成果を得た。

（１）姉崎の研究成果

幼少期

姉崎の宗教意識が芽生える原点は、家族の者が信仰心に厚い生家（京都府）にある。幼少期の彼に見られる宗教意識は、両親が行う家業（全国の浄土真宗・仏光寺派の仏画を扱う仕事）の観察、勤行やお寺参りを通して祖母が行う躰によって養われる。

生家に出入りする僧侶の話が少年期の姉崎に、宗教を考えるきっかけを与える。同じ頃に通った英語塾での平井金三（１８５９－１９１６）のスペンサー主義による授業が彼に、宗教の進化についての科学的な解説を教示する。

姉崎の宗教意識の萌芽は、幼少期を過ごした生家での家庭環境に見ることができる。

１８９３－１９０３年における姉崎の仏教思想

１８９３年に帝国大学文科大学哲学科に入学して２年間、姉崎は井上哲次郎（１８５５－１９４４）の授業科目「比較宗教及東洋哲学」を受講する。井上は、国家統合の確立を視野に入れて、古代インド宗教を講義する。姉崎は、このような視野から距離を置いて、恩師の三つの取り組み（歴史的研究、比較的研究、批評的研究）を学んでいる。その研究成果が、彼の四つの著書 恩師の校閲による『印度宗教史』（１８９７）、同じ校閲による『印度宗教史考』（１８９８）、『仏教聖典史論』（１８９９）、『上世印度宗教史』（１９００）に認められる。三つの取り組みを体系的に推し進めた結果、彼は『宗教学概論』（１９００）の中で、人心を起点とする宗教思想を抱く。

１９００－１９０３年、姉崎は海外へ留学する機会を得る。留学先に憧憬国のドイツが含まれていたため、彼は人心の望ましい姿を期待する。しかし、彼が実際に目の当たりにするのは、人心も社会も乱れたドイツである。

彼は、このような乱れが日本でも存在することを認識するようになる。そうした折、大学時代からの親友である高山樗牛と海外留学中に交わした書簡が彼に、人心の望ましいあり方の手がかりを与える。それは、何よりもまず日蓮上人と一体になろうとする愛情である。帰国前の彼が気づいたのは、このような愛情こそが人心に一番大切なことである。

姉崎の仏教思想の二面性

海外留学から帰国後の姉崎は、高山樗牛の早世を悼み、畏友の生前の作品・評論を収めた全集の刊行などを企画して、畏友が心酔した日蓮上人に本格的な関心を抱くようになる。こうした企画や関心が縁で、日蓮上人の教えを日常生活に広く適応する日蓮主義の実践者である田中智学（１８６１－１９３９）や本多日生（１８６７－１９３１）から強い影響を受ける。この日蓮主義による排他的な信仰が姉崎の仏教思想の一面である。

姉崎は、日蓮主義による社会活動を行いながら、様々な信念を包括し共通の目的を達成しようとする柔軟な信仰も抱いている。このような信仰は、宇宙の統一の真理（一乗妙法）の探究に基づく彼の仏教思想の別の一面である。

こうした仏教思想の二面性は、日蓮信仰から発して密接な関係である。それは、１９０３年に帰国した姉崎が１９１３年にハーバードで講義する前までに認められる。

ハーバードでの講義における姉崎の仏教思想

姉崎の講義を筆記したエリオットの「東洋哲学ノート」は、歴史的な視点から基本的な仏教教学を書き記しているが、日蓮仏教の紹介で締めくくっている。そこでは、『法華経』の行者として、日本に仏国土の実現を目指す日蓮上人の姿が説かれている。

姉崎の講義内容が日蓮仏教に行き着いていることは注目される。彼は、『法華経』に全幅の信頼を置く日蓮上人の真摯な信仰姿勢の背景を講義するため、仏陀の根本思想に立ち返ることを忘れていない。

１９１４年、一時帰国した姉崎は、所属する帰一協会の例会の歓迎会で、日本の仏教研究者として、日本文明を研究したい受講者への学問的貢献を強調する。それは、『法華経』の行者としての日蓮上人に倣った菩薩行動にかなうことを意識したものである。この報告では、カリフォルニア州の排日問題に言及しているように、姉崎は日米関係も強く意識している。彼は、東洋を代表する日本と西洋を代表するアメリカが協同して新しい世界文明の形成を希求しているのである。彼がハーバードでの特殊講義を日蓮上人で締めくくるのは、そうした日米関係の連携を目指していたと言える。

渡米前、姉崎の現実社会における菩薩行動は国内に限られていた。この行動範囲は、八

ーバードでの講義を契機に、アメリカに広げられる。その点で、エリオットの「東洋哲学ノート」は、日蓮信仰を堅持して、菩薩行動を実践する姉崎の仏教思想を知る手がかりとなる。

(2) エリオットの研究成果

幼少期と祖父

エリオットは両親の厳格な家庭教育の中で成長する。両親の態度は、エリオット家を墓場から支配していた高名な祖父の遺訓というべきものと深く関係する。それは、公共への義務、慈善、立派な仕事であり、同家の家訓といっても過言ではない。エリオットは家庭で、祖父の教えに反する行為が罪であるという躰を受けたり、すべきこととすべきでないことを教えられたりする。彼の幼少期は祖父の影響のもとにある。

パリ遊学と家庭教育

両親の家庭教育の支えとなっているのは、エリオットの祖父が信奉するキリスト教ユニテリアン派である。この宗派に基づいて、祖父は現実を重視して人間社会の改善を目指し、エリオット家の家訓を残しているのである。エリオットは、ユニテリアン派を厚く信仰するように育てられたが、この宗派を行動規範として強要する家庭教育が重圧となる。

そこでエリオットは、1910 - 1911年にパリへ遊学する計画を立てる。当初、両親はこの計画に反対する。それは、彼の祖父の遺訓を忠実に実行する両親の家庭教育に反するからである。エリオットは、両親を説得してパリへ旅立つが、異国への期待と両親への背信行為との板ばさみになる。その心情は、当地で脱稿された詩の内容からうかがうことができる。

「東洋哲学ノート」と海外留学

パリから帰国後、その頃に執筆された詩の内容が示唆するように、人生の進路に悩むエリオットの苦しみは続いている。

そのとき、エリオットは姉崎の講義「日本における仏教各派の宗教的・道徳的思想」を受けている。彼がこの講義から学んだことで注目されるのは、仏陀の四諦（苦諦、集諦、滅諦、道諦）大乗仏教中観派の祖ナーガールジュナ（150 - 250頃）や中国天台宗の開祖の智顛（538 - 598）に認められる中道思想、現実を肯定する日蓮上人の強い意志である。これら四人の教学はエリオットに、人生の苦しみのあり方とその克服を示唆する。

学生時代のエリオットは、相関関係を説くイギリスの哲学者F・H・ブラッドリーに依拠して哲学を研究している。彼はまた、古代ギリシャ哲学者ヘラクレイトスの断片的な文章を読んで、ブラッドリーと同じく認識の原点としての「今・ここ（今いる所）」に注

意を払っている。イギリスの哲学者デイヴィッド・ヒューム（1711 - 1776）から経験の大切さに気づいているし、アメリカの心理学者・哲学者ウィリアム・ジェイムズ（1842 - 1910）から行動を重視する信念を学んでいる。彼は、これら四人と似たような考え方を姉崎の講義を介して知る。

エリオットの1914年の海外留学は、彼がブラッドリーを主として研究するばかりではなく、親元から離れて自分自身の人生を探すためでもある。この行動を後押ししたのは、ハーバードで勉強した内容に加えて、姉崎の講義を筆記した内容であると判断される。

(3) 研究成果の期待

研究成果報告書（日本語版と英語版）を、姉崎やエリオットに関係のある組織等に郵送したり、同報告書をホームページで公開したりする。その結果、次のような成果が期待される。

本研究は、エリオット、姉崎正治、仏教などに関心のある国内外の人々に知的好奇心を喚起して、各国の人々の相互理解の一助となるであろう。

先の東日本大震災（2011年3月11日）を受けた日本から、共生社会の必要性の考えを国際社会に発信することにもなるであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

古賀元章、幼少時代における姉崎正治の宗教意識の萌芽、言語文化学会論集、査読有、42号、2014、277 - 289

古賀元章、学生時代における姉崎正治の宗教思想の形成、比較文化研究、査読有、113号、2014、35 - 46

古賀元章、1903 - 13年における姉崎正治の宗教思想 井上哲次郎と高山樗牛の影響、言語文化学会論集、査読有、43号、2014、133 - 148

古賀元章、T・S・エリオットの「東洋哲学ノート」についての一考察 学生時代の彼の勉学・人生とのかかわり、査読無、福岡教育大学紀要、査読無、64号1分冊、2015、1 - 14

古賀元章、姉崎正治の宗教思想の二面性 1903 - 13年に焦点を当てて、査読有、比較文化研究、115号、201 - 211

〔学会発表〕(計1件)

古賀元章、姉崎正治とT.S.エリオット
にとって「東洋哲学ノート」の意義、言語
文化学会九州支部第11回大会、2015
年3月22日、北九州工業高等専門学校
(福岡県北九州市)

〔図書〕(計0件)

なし

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

なし

取得状況(計0件)

なし

〔その他〕

ウェブ上で公開

[http://www.csf.ne.jp/~asac/Koga/koga
note.html](http://www.csf.ne.jp/~asac/Koga/koga
note.html)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古賀元章(KOGA, Motoaki)
福岡教育大学・教育学部・教授
研究者番号: 80416445

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし